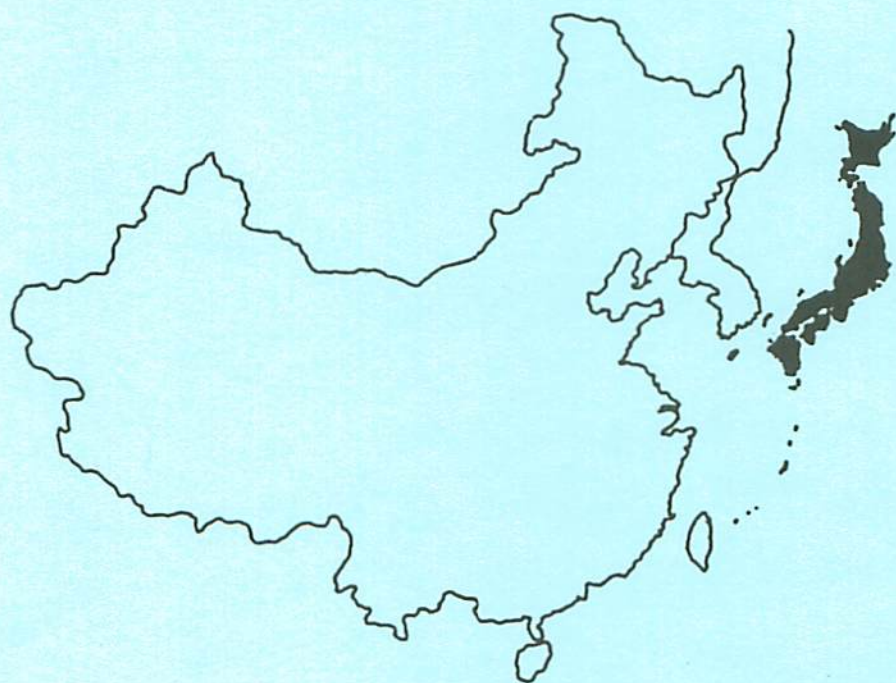


日本ビジネス中国語学会

会 報

第16号



目 次

日本ビジネス中国語学会会報第16号

第16回総会報告・議事録（要旨）	1
第20回公開講演会・シンポジウム	
ビジネス中国語トレーニング ― 会話と文書 ―	待場 祐子..... 3
私の通訳体験	武川 昌子..... 6
サーチナHP掲載分	
日・中時事用語あれこれ随想（1）	待場 裕子.....10
私の中国語学習体験①	藤本 恒.....11
2005年度第3回研究会発表	
技術現場での翻訳と通訳の仕事 ― 車両ビジネスを中心に ―	周 喆.....12
当たり前ようで当たり前でない中国語	岡野 涼子.....16
設立趣意書	19
日本ビジネス中国語学会会則	20
役員名簿	21
入会のご案内	22

第16回総会開催

公開講演会・会員シンポジウム（第20回）を同時開催

日本ビジネス中国語学会の第16回総会は、6月17日（土）午後2時より、大阪市北区の大阪中国語学院において開催され、出席者による熱心な審議が行われました。

総会成立を確認後、藤本恒会長が議長をつとめ、2005年度の活動報告、収支報告と今年度の予算案、活動案などの審議を行い、それぞれ原案通り承認されました。

今年度は役員改選の年度に当たりましたが、全理事の再任と東浦正重、永富健史氏の新理事選任が全会一致で承認されました。また、理事の互選により藤本恒会長、榎原茂樹理事長がそれぞれ再任されました。



総会での討議内容及び検討課題は、総会開催案内状に記載されていた通りですが、

1. ビジネス中国語検定試験は大阪会場以外に獨協大学の協力で東京会場でも実施できたので、今後も広報活動を強化し、受験者の増大をはかる。
2. ホームページの内容を引き続き充実させタイムリーな更新を行う。
3. 今年度は東京でも公開講演会・シンポジウムを実施できるように努力する。
4. 会員の拡大と若手理事の増強をはかる。
5. 会員有志による研究会を大阪で行っているが、情報交換・相互学習の場としても活用できるので、誰でも自由に参加できる会合として継続して行く。
6. 従来有志で試験的協力を行っていた日本中国語検定協会に対する出題協力を当学会事業の一環とし、「スコア式ビジネス中国語検定試験」への出題協力を行う。
7. ビジネス中国語普及に関する諸事業を継続する。

等の議題に付き審議を経て承認されました。



総会の後、公開講演会・シンポジウムが開かれ、待場祐子理事が「新著案内『ビジネス中国語トレーニング ― 会話と文書 ― 』」、武川昌子会員が「私の通訳体験」……中国系金融機関での体験、大手日系企業で中国関係の案件を担当して……の演題で講演されました。（講演要旨は本号に掲載）

終了後、同学院にて懇親会を催し、講演会参加の学生達も交え経験談など自由に語り合い親睦を深めました。

日本ビジネス中国語学会第16回定期総会議事録（要旨）

1. 14:00 議長選出 会則にもとづき藤本恒会長が議長をつとめる。
 2. 総会成立 現在有効会員62名の内、出席者9名、委任状31名、合計40名。
過半数で成立を確認。
 3. 報 告 活動報告（榎原茂樹）：資料にもとづき報告。承認
収支報告（岩下孝彦）：別紙の通り収支状況を報告。承認
監査報告（待場裕子）：正確に記帳されている事を認める。承認
 4. 活動案提出 榎原理事長より資料にもとづき提案。承認
 5. 予算案提出 榎原理事長より資料にもとづき提案。承認
 6. 理事改選 理事全員の再任と新理事2名を選任 承認
- 14:30 閉会

*総会成立会員数62名は2005年度会費納入者の数で、会員名簿数とは差があります。



新著案内

「ビジネス中国語トレーニング ―会話と文書―」CD付

2006年4月 白水社出版

(定価 2200 円+税)

流通科学大学 名誉教授 待場 裕子



1. 出版までの経過

- 1988年 流通科学大学創立 伊地智善継先生副学長として赴任されると同時に、中国語担当教員として赴任
- 1990年 日本ビジネス中国語学会 伊地智善継先生の発案により設立
- 1996年～2004年 流通科学大学にて「ビジネス中国語演習」担当
- 2003年～2006年 実学重視の大学の方針により、ビジネス中国語の学習書の需要に応えるため、プロジェクト助成を受け、同僚の能勢良子、森宏子両氏と共同執筆にとりかかる。先達諸士の助言を仰ぎ、ネイティブのビジネスマン石威氏の監修を得て、2006年4月白水社より出版。

2. 本書の編集方針と対象読者

ビジネス中国語の実力養成を目的とし、学習参考書として独学の需要に応えながら、授業、講習会のテキストとしても活用できる内容。初級中国語をマスターし、基礎中国語力を備えた読者を対象とする。

3. 本書の内容

日本のビジネスマンが中国へ出張してビジネスを進めるに当たり、想定される最も典型的な下記の15のケースを取り上げている。大学などでは中国語学習2年目のレベルを想定しているため、ビジネスの基本的な内容になっている。



- | | |
|---------------|-----------------|
| ①. 空港での出迎え | ⑨. 納期の交渉 |
| ②. ホテルにチェックイン | ⑩. 輸送方式と保険 |
| ③. 日程打ち合わせ | ⑪. 支払い方式 |
| ④. 会社を訪問する | ⑫. 契約の調印 |
| ⑤. 工場見学 | ⑬. 商品検査とクレーム |
| ⑥. 引き合いとオファー | ⑭. 対中投資 |
| ⑦. セールス | ⑮. パーティにおけるスピーチ |
| ⑧. 商品の買付 | |

4. 本書の構成

- (1) 上記 15 のケースにおいて、日中双方の折衝中に頻繁に交わされる 6 組の会話と、関連の文書。これに多くの語句注釈と訳文付き。
- (2) 各ケースの実力養成のため、多くのトレーニングパターンを用意。
 1. 各ケースの関連テーマを扱った肝要なミニ会話
 2. 各ケースの表現パターンに置き換え用語を配した置き換え練習
 3. 日本語から中国語への翻訳練習
(上記解答を別冊綴じ込み)
 4. 各ケースに必ず役立つ常用表現 10 句
- (3) コラムに、「中国語ビジネス文の書き方」「中国ビジネス関連サイト」紹介など、中国ビジネスに役立つ多くの情報を収集。

本文の会話、練習問題、常用表現などの中国語音声全て CD に収録。

5. 本書の活用法

独習の場合でも、授業の場合にも、CD を大いに活用して、以下のトレーニング方式を活用されたい。授業などでは小テスト方式を採用。

① 会話について

☆音読練習

- ① 先ず本文を黙読してみて、意味がわからなければ、語句の注釈や訳文を参考にして、意味を徹底的に理解する。
- ② その上で音読練習を始める。CD を途中区切りながら繰り返し聞き、音読練習する。
- ③ 上達すれば CD を途中区切らず、CD と同じ速度で読む様にする。
- ④ 更に上達すれば、本を見ないで、音声のレピートをする。
- ⑤ CD の中国語音声を書き取りすることも有効な学習手段。

☆中国語から日本語訳の練習

- ① 初め本文の中国語を見ながら、日本語を声に出して訳してゆく。
- ② 次は本文を見ないで CD の音声の区切って聞きながら、日本語の訳を声に出して話してゆく。

☆日本語から中国語への翻訳練習

- ① 日本語の訳文だけを見ながら、もとの中国語に文字で訳して書く。
- ② 日本語の訳文だけを見ながら、中国語の音声に出して訳す。

② 文書について

- ① 語句の注釈と訳文を参考に、先ず内容を徹底的に理解する。
- ② 次に、中⇒日、日⇒中 へと、原文や訳文を見ないで正しく訳す。

③ 練習問題—1、2について

- ① 綴じ込みの「解答編」を参考に、先ず内容を正しく理解する。
- ② CD を繰り返し聞き、同じスピードで発音できるまで練習する。
- ③ 次に本を見ないで CD を聞いて、中国語を発話できるようにする。
- ④ CD の中国語を聞いて、日本語に音訳する。
- ⑤ CD の音声を区切って聞き、中国語を書き取る。
- ⑥ 仕上げは、解答編の日本語を見ながら、中国語に訳す。
これは文字で書くか、音声で発話するか of のいずれかの方法で。

④ 練習問題3について

- ① 先ず自力で中国語に訳せるか試してみる。
- ② 次に「解答編」を参考に、正しく訳せたか確認する。
- ③ 日本語を見ながら、繰り返し CD を聞くと理解がいつそう進む。
- ④ その上で、CD を聞かなくても、中国語に訳せるか試してみる。
- ⑤ CD の中国語の書き取りをすることも、学習には大変有効。
- ⑥ CD の中国語を、聞きながら日本語に訳してゆく。

⑤ 常用語句について

中国語と日本語が左右対称にレイアウトされている。

- ① CD を活用し、先ずスムーズに発音できるまで、音読練習する。
- ② 本を閉じ CD を聞いて、その中国語を書き取るのも有効な手段。
- ③ 日本語の訳文を見ないようにし、CD を聞いて日本語に訳す。初めは中国語の文字を見て訳すが、次は見ないで訳す。
- ④ 仕上げは、中国語を見ないで、日本語から中国語に訳す。

6. 今後の課題

中国ビジネスを取り巻く環境は常に変化、発展しており、日中間のコミュニケーションの内容も絶えず変化し続けている。新しい環境と、それに付随して使われる新しいビジネス用語の表現は、絶えずチェックして行く必要がある。

以上

京セラ株式会社勤務
武川晶子



1. 私と中国語

中国語を学び始めたのは大阪外国語大学中国語学科に入学してからのことです。本日お集まりの方々の中には学生さんもいらっしゃるということですので、大学から中国語を始めた私のような者でも何とか通訳者として仕事をさせていただくまでに成長することが出来た、そういう体験談についても参考までにお話させていただこうと思います。

大学時代は、所謂真面目な学生で、約1時間半の通学時間も苦にせずテキストの暗唱をするなど時間の有効活用を試みていました。また留学生との交流や通訳ガイドのアルバイトも積極的に行うなど、自ら中国語を使う機会を探し求めては実践していました。限られた時間や条件を有効に利用する方法は大学時代に養ったといっても過言ではないでしょう。シンガポールの華人社会についての論文を執筆するため、大学3年生を終えてから1年休学し、シンガポール国立大学の華語研究センターに1年弱留学しました。シンガポールでは論文(歴史)資料の収集だけではなく広東語も磨くことができました。

2. 中国人とともに働く

(1)就職にあたって「中国語を更に勉強する必要性にかられる」

単純に「中国語を生かした仕事」を考えていましたら、中國銀行(Bank of China)大阪支店に採用されることになりました。支店長と中国語での面接で採用が決定になったようです。

仕事では「中国人と一緒に働く」そして「実務での中国語」に苦労しました。仕事に対する姿勢や、また言葉も大学で学んだ程度では太刀打ちできません。

「仕事をする上での中国語が満足なレベルになれば、もっと仕事が楽しくなるのではないか」と考え、故伊地智善継先生にいろいろご相談申し上げましたところ、「大阪中国語学院で戸毛敏美さんという女性が通訳を教えているから、一度勉強してみたらどうか」とアドバイスいただき、戸毛先生のクラスでお世話になることになりました。その後、藤本恒先生からは「衛星放送や便利な電子機器」を有効に活用した中国語の学び方を教わり、武吉次朗先生の翻訳クラスでもこなれた日本語訳や中国語の読み込みについて大変興味深く学ぶことが出来ました。

さらに通訳の技術を磨くため、サイマルアカデミーでも学びました。東京にしかなかった同アカデミーの中国語クラスが大阪校で開講される、そのイベント(?)として「成績がよければ塚本慶一先生の授業が受けられる」というのです。その誘い文句(?)につられて、夏期講習に参加したのがきっかけです。運良く上級クラスにいらていただき、塚本先生の授業を受けることが出来ましたが驚きの連続でした。生徒側が一生懸命作った中国語訳については特にコメントはされず、発表を聞き終わった後で「僕ならこう訳します」とほとんど四文字四文字が連続する、格調高い中国語を披露されます。「トップのプロ通訳者にはそれにふさわしい格が必要」ということを初めて実感した講義でした。

(2)通訳者として

社会人になってからも通訳、翻訳の勉強を続けた成果もあってか、中国銀行大阪支店では支店長専属の通訳として人民元貸付の折衝などを担当するようになりました。支店長が通訳に求めていたのは「自分が話すことを過不足無く正確かつ誠実に先方に伝えること」でした。私がその条件に一番近かったようで、対外折衝は常に私を同席させることになっていました。大金を扱う緊張感ある仕事ですから「過不足無く正確かつ誠実に」というのは当然ですが、通訳者としての姿勢を叩き込まれた時代でした。先輩通訳者からも「通訳は黒子であることを忘れてはならない」というお話をよく伺いましたが、「決して出すぎてはならない」「確実に訳す」ことがどれほど大切であるかを実感する日々でした。

3. 日系企業への転職

支店長の通訳として日本の商社やメーカーを訪問していると、「そこまで中国語が出来るのなら、日系企業で需要があると思うけれど興味は無いの?」といわれるようになってきました。もう少し仕事の幅を広げたいと思っていたので、転職を意識するようになります。中国と取引のある日系企業は沢山ありましたが、「中国で如何に儲けるか」が前面に出ている会社もありました。そのような中、中国経済の急速な発展に伴い「中国脅威論」が台頭する中、創業者自らが「日中共栄」を掲げ中国進出を展開している会社—京セラ株式会社に関心を持つようになりました。運良く同社の秘書室で稲盛名誉会長をはじめとする会社役員の中国案件に携わる秘書として、中国語の堪能な「日本人」を募集していたので、応募したところ採用されました。

京セラでは前職と全く異なる体験を沢山させていただくようになりました。経営理念がしっかりしている会社で、「創業者の哲学、思想、考え方を正しく伝える」ことが最重要視されます。まず日本語でしっかり理解することから始めました。次に中国現地法人、事業内容についての理解を深め、合併パートナートップとの付き合い方においても共存共栄していく姿勢をうまく伝えていくことを心がけました。

それだけではありません。組織の大きな会社であるだけに会社のことや事業について正しく伝えていくためには常日頃から各事業部の担当者や広報といった部門との連携を強化する必要があります。常に最新の動きについての情報が得られるように協力関係を築くこととお互いの情報共有化を図る努力が大切です。いざ通訳をする際の理解度に差が生まれます。

(1) VIP 対応

創業者である稲盛和夫名誉会長が中国と大変強いパイプを有していることから、これまで経験したことのないVIP対応を必要とされました。中国政府要人との面談が多くあり、日本で受け入れる場合も、中国へ訪問する場合も全てプロトコルがあり、失礼の無いよう完璧にこなさなければなりません。中国語の通訳に関する本に紹介されていないケースも多々あり、毎回緊張を強いられました。受け入れる場合に一番神経を使うのが「序列」です。また車の手配、食事会の手配、関係者への資料作成(来社者がどれほど重要なポストにあるのか、説明しなくてはなりません)、挨拶文の作成、関連部門との調整など。会社にあつては単なる通訳ではなく、秘書としての仕事も全面的に担当せねばなりません。

訪中の場合、初めての経験ばかりで大変勉強になりました。創業者稲盛が訪中しますと、飛行機を降りたところに政府の関係者が来ておられ、北京ではそのまま貴賓室へ通され、部屋で談笑している間に入国審査が完了します。人民大会堂に入るには事前に登録された人物以外は立ち入り禁止、釣魚台も然り。

大舞台での通訳も経験しました。緊張しても仕方ありません。こういうときは先輩通訳者の失敗談を思い出し、「あれほど経験をつんだ方でもいい間違いをするのだから、私ごときが間違えても仕方の無いこと」、と開き直って現場に臨むことも多々ありました。

(2) 社会貢献活動

創業者稲盛は中国において西部地域の貧しい学生を支援する奨学基金や工場を設置している地域の子供たちを日本に招き異文化交流を体験してもらうなどの社会貢献活動を展開していますが、そうした活動が評価され、2004年に中国日本友好協会から「中日友好の使者」という称号を授与されました。私個人と致しましてもビジネスの話だけではなく、中国と日本の交流や相互理解に役立つ活動に取り組みたいという思いを持っておりましたので、通訳としてその一端を担うお手伝い出来ることは大変喜ばしいことと誇りに思っています。

4. 通訳者の悲喜こもごも

前職から組織に属しながらも「通訳」を主に仕事をしてきて感じるのは、まだまだ日本

では通訳者は「便利屋さん」になりやすい、ということです。まるで自動翻訳機扱いされることも少なくなく、「通訳も人間であり、話している内容が分からなければ外国語に置き換えて伝えるなど無理である」ことを理解していただくようにしています。無理な状況をいわれるがままに飲んだためにいい加減な訳をするような通訳者も見かけますが、もっとプロ意識を持った、質の高い通訳者が増えていかなければ悪循環が続くように思われ、心配です。

京セラでは創業者の稲盛名誉会長が「次世代の育成」を大変重視していることもあり、通訳者についても「社内事情をよく理解している通訳者を育てなければならない」とお考えで、私に対しても「育てよう」という姿勢で接して下さいます。入社間もない海のものと山のものとも知れない私を積極的に通訳として抜擢くださり、鍛えてくださいました。例えば式典などで事前に挨拶文を準備していても直前に「原稿どおりには読まないからな」と仰います。一瞬不安になるのですが、原稿に頼らなければ通訳できないようではだめだ、と反省もさせられます。稲盛名誉会長は短く区切って分かりやすくお話くださり、通訳者が通訳しやすいように気遣って下さいます。「聞いている人が分かるように通訳しなければ意味が無い」ということと「若手通訳者を育てなければならない」という2つの目的をうまく達成に導かれる方、という印象を持っています。

残念ながら全ての人が稲盛名誉会長のように接して下さるわけではありません。通訳者を使い慣れていない人ほど、人前で話す、ということにも慣れておられないようで、ご自身が話すので精一杯になり、通訳者がついていけなくなるケースも多々あります。そういうときには思い切って「すみません、いったん切ってください」と申し出るようにしています。分からなくなつては元も子もないからです。

大学から学び始めても努力次第では「通訳者」として仕事ができるまでに成長することも出来ます。ただ、通訳者になることが目的というのではなく、通訳という仕事を通して見識を広げ、自分の目指すもの、夢や理想に近づくことが出来るようになる一層よいと思います。



日・中時事用語あれこれ随想（１） 2006年8月

日本ビジネス中国語学会 理事 待場 裕子

「ライブドア」： “活力門”

最近の時事中国語の中で、日本語からの中国語訳として、その「当意即妙」の点では、「ライブドア」の“活力門”に勝るものはないのではないのでしょうか。ライブドアのホリエモンこと堀江貴文社長（当時）が、今年1月ついに東京地検特捜部に逮捕され、もちろんこのニュースは中国にも報じられました。「ライブドア」は“活力門”と訳されました。中国語に堪能な方々にはこの“活力門”の発音が、“Huolimen”（声調省略）であり、まさに「ホリエモン」の発音そのままの出来であることに、「喝采」されたのではないのでしょうか。“活力門”は「ライブドア」の意識であると同時に「ホリエモン」でもあるのです。

「六本木ヒルズ」： “六本木山庄(大楼)”

彼の住まいである「六本木ヒルズ」の方は、「ヒルズ」の意味を中国語に訳すとどうしても“山庄”となります。この“山庄”の字面からは、ひなびた田舎の山間にあるコテージをイメージしてしまうかもしれません。中国語では、日本語のように外来語の音訳語が氾濫しているわけではありません。欧米などの人名・地名の固有名詞は音訳するしかありませんが、一般の語彙を中国語に訳す場合、例えば「コンピュータ」は“电脑”と訳すように、本来の意味を訳す場合が圧倒的に多いのです。しかし最近続々と誕生する外来新語の中国語訳は、やむを得ず音訳しながらも、極力漢字本来の意味を生かした名訳が多いものです。例えば「インターネット」は“因特网”、「ブログ」は“博客”など。

「村上ファンド」： “村上基金”

「ファンド」は“基金”であるとは、もっともな訳としかいいようがありません。「中国新語ビジネス用語辞典」（大修館書店）によると、他に“储备基金”、“准备金”などもあります。しかしここでは4文字にまとまる“基金”がいいでしょう。このような例を見ると、日本語のカタカナ外来語も、なかなかそれぞれ微妙なニュアンスも表しているようにも思え、カタカナ外来語の氾濫が一概によくないとばかりは言い切れないようです。

「インサイダー取引」： “内部交易（内幕交易）”

「インサイダー取引」は中国語では“内部交易”であるといわれると、これも味も素っ気もない訳語に思えます。因みに日本の「カタカナ語辞典」（三省堂）で「インサイダー取引」をひくと、これは「不正な株売買の1形態、内部者取引、…」とあり、そのダーティなイメージがこの語には定着していることがわかります。“内幕交易”であれば、なにやら不正のイメージを感じますが、使用頻度としては“内部交易”が多いようです。まさか中国ではそれほどダーティなことではないと思われているわけではないでしょうが。

私の中国語学習体験① 教室で教わらなかった中国語の号令

藤本 恒

私が神戸市立外事専門学校（現在の神戸市外国語大学）で中国語を学んだのは今から半世紀以上前の1948年からです。1951年に無事卒業させて頂きましたが、当時中国語を使って仕事ができる就職先が探しあたらず、たまたま恩師が日本語を教えておられた神戸中華同文学校（華僑子弟の為の小中学校）へ代講でもぐりこんだのが、中国語をビジネスとして使った初めての体験でした。日本語教員であるため、中国語はそれほどできなくても何とか勤まるだろうと考えたのですが、すぐにそれが大間違いであったことに気づかされました。当時は新中国が誕生して間もなく、戦前から日本にいた知識人の多くが新中国の建設のため帰国しました。神戸中華同文学校の中国人教員も例外ではありません。四月から始まった新学期に日本語を教えるため出勤した私に学校側から言い渡されたことは、春休み中に帰国した先生の代わりに小学校四年生の組担任を引き受けて欲しい。音楽・図工・体育はそれぞれ担当の先生がいらっしゃるから教えなくてよいが、その他の教科はみなやって貰いたい……。というものでした。就職難の時代でもあり、断る勇氣もなく、若気の至りというか無鉄砲とでも言えばよいのでしょうか二つ返事で引き受けました。

華僑学校です。教員は中国語で話さなければなりません。朝の朝礼から始まるこの学校の教員生活で、外語で三年間学んだ私の頭の辞書にない中国語の単語が山ほどありました。

一時間目、算数の授業です。教室へ入ったとたんに、級長（＝“班长”）が大声で“起立！”と叫び、続いて“敬礼！”“礼毕！”“坐下！”となります。日本語なら「起立」「礼」「直れ」「着席」なのでしょうが、元気一杯の子供の声に“当头一棒”（⇒がつんとやられた）を喰らわされたというところです。

色々ありました。今でも忘れられない思い出は、学校で教えてもらえなかった号令（＝“口令”）用語でした。体育は担当しなかったものの、クラス担任でしたからクラスの学生に号令をかけることは当然必要になります。まず、どうしても必要な号令用語に次のようなものがあります。

「集合」・「気をつけ」・「休め」・「整列」・「前（右）へならえ」・「直れ」・「番号」・「右向け右」・「回れ右」・「前へ進め」・「全体止まれ」……。次に、少しややこしいのには「駆け足前へ進め」「右向き前へ進め」などというのがあります。

対応する中国語です。“集合！”“立正！”“稍息！”“排队！”“向前（右）看——齐！”“手放下！”“报数！”“向右——转！”“向后——转！”“起（开）步——走！”“全体立——定！”“跑步——跑！”“向右转——走！”（号令です“一”は長く延ばして後の一語を強く）

面白いのは、日本語の号令で、「直れ！は 礼⇒直れ・前へならえ⇒直れ」で同じですが、中国語ではそれぞれ具体的動作で示します。同様に、呼ばれたときの返事は「ハイ」ですが、中国語では出席点呼の際は“到！”となり、「ハイそうです」と肯定を示す「ハイ」は“是！”となります。同じ点呼でも軍隊などでは“有！”と答えるのが普通ですね。

余談です。今の中国では「前を向く・前を見る」⇒“向前看”でつい“向钱看”を連想しますが、考えすぎでしょうか。

技術現場での翻訳と通訳の仕事

－車両ビジネスを中心に－

周 詰

2006年1月21日

研究会での発表より

一、はじめに

各位老師好！今日は初めてこの場で、大先生、大先輩たちの前で発表させていただきます。私は現在、鉄道車両に関する通訳と翻訳の仕事をしています。本日は、今の仕事の関連で、まず鉄道業界、その中の中国の鉄道事情を簡単に紹介して、皆さんが日常的に電車に乗る時、目にする部分を中心に、部分的な専門用語も交えて、日、中対訳を皆さんに紹介したいと思います。私は車両関係に携わってから日も浅いこともあり、今日は抛砖引玉（レンガを投げて玉（ぎょく）を引き寄せる、たたき台にする）で、ぜひ先生方のご指導をお願いいたします。

二、車両業界概要

（一）中国と日本の車両業界

1. 中国の鉄道を管理する国の機関は鉄道部です。八十年代以前、鉄道車両は鉄道部からの指令的な計画によって（指令性计划）、鉄道部所属の車両メーカーにより製造されてきました。2002年、南車と北車グループ（南車集団、北車集団）が設立され、これらの車両メーカーはそれぞれ、二大車両生産グループの傘下に入ることになりました。
2. 日本の車両業界—輸出の多い業界
2004年度、新造車両数は新幹線151両、JR在来線1034両、公民鉄831両、輸出367両、合計2383両で、意外に輸出が多いです。車両部品や電機製品を含めて、市場規模は3200億円強（03年1787両）、5大車両メーカーが占めています。近年、国内需要が期待できないため、商社と一緒に、海外進出に力を入れています。

（二）中国鉄道発展の概略

1. 歴史—1880年、清政府が許可をくだし、イギリス商人が唐山から9キロの石炭輸送用の鉄道を建設しました。しかし、ロバや馬で牽引する許可しか与えられていませんでした。侵略戦争で結ばれた不平等条約によって、1900年前後、外国による中国での鉄道建設ラッシュが始まりました。しかし、鉄道は東北や沿海地域に集中して、設備なども粗悪で、各地のレールや機関車の種類もまちまちでした。

この時期、実際に鉄道を使って、長い旅行をした有名人がいました。それは西太后と当時の皇帝光緒でした。西太后は豪華に飾りつけられた専用列車で、北京

から先祖の地である奉天まで行きました。この列車は西太后のための「御用列車」ですから、乗り心地はもちろん抜群でした。しかし大臣たちが彼女への配慮と彼女自身のわがままが原因で、スピードは物凄く遅かったのです。一般の人が30～40分で行ける距離なのに、その豪華な専用列車では2時間もかかりました。また、西太后の前では、誰も座ることは許されていないので、列車の運転手たちでさえ、立ったままであったり、ひざまずいたりして、運転業務を遂行したそうです。

2. 中国鉄道発展の現状

- a. チベット鉄道：去年10月、中国で唯一鉄道のなかったチベット自治区に鉄道が敷設されました。過酷な高原環境などの原因で、工事期間は実に50年の歳月がかかりました（青海チベット鉄道＝青藏铁路）。
- b. 提速調図（スピード・アップとダイヤ改定）：1949年建国以後、全国の鉄道網の建設が始まりました。1999年末現在、鉄道の総運行距離は57,923kmに達しました。数値的な成果はありますが、鉄道の分布密度は依然低く、人口で換算すれば一人当たり約5.3cm、世界で100位以下、国土面積で換算すれば1平方キロ当たり約6.6cm、世界で60位以下に過ぎません。今後、西部を初め幹線網の整備・調整とスピードアップとダイヤ改定、サービスの向上などを目指しています。今年の4月から、第6次スピード・アップの準備に着手しています。
- c. 春運（春節の時期の帰省ラッシュ）：来週はちょうど中国のお正月です。この時期になると、春運が始まります。春節を迎えるために、旧暦の十二月中旬ごろから、学生（学生潮）や出稼ぎの農民たち（民工潮）が故郷に帰り、また旧暦の一月十五日すぎには、また学校や出稼ぎ農民たちは都会に戻ります。この大体40日間で、延べ約1億人以上が鉄道を利用しています。これは日本の総人口に匹敵します。
- d.

三、仕事について

（一）仕事の内容

1. 翻訳

最初は業務上のレター整理と英語から中国語への翻訳でした、後に英中翻訳に専念しましたが、仕事をコーディネートする人がいませんでした。今では、コーディネーターのもとで、期限に追われながらも日中/中日の翻訳（時には英中翻訳）をしています。

仕事上の翻訳に関して、専門用語が多く、辞書にも載っていない単語を捜し求めなければなりません。一見簡単そうに見える言葉でさえも、ぴったりの訳に辿り着くまでは、まさに紆余曲折です。

2. 通訳

仕事を始めて半年後、中国の元副省長等の表敬訪問という通訳業務を受け、その場で

双方から絶大な信頼を得て、それがその後の翻訳と通訳の原動力になりました。その後、訪問客、研修指導、授業、技術会議、セレモニーなど数多くの場面で通訳しています。特に、上層部対象の講義は、双方各分野の専門家も多く、通訳する自分はその分野に関しては素人同然の状態です。そのために、人事管理・生産管理・品質管理・経営と経理・プロジェクト・マネジメントなどの講義通訳に関しては、外国語としての日本語はもちろん、母国語の中国語でさえ良く知っておくことが必要で、講義の時、自由に使いこなせるように、事前に猛勉強をしました。

(二) 仕事のための知識の蓄積

ビジネス上の翻訳、とりわけ技術系の翻訳・通訳は、我々日常会話的な単語量では、当然不十分です。その業界及び各領域の専門知識と情報量が要求されます。蓄積のためのリソースは以下にあります。

- 1、翻訳依頼者
- 2、返信によるフィードバック
- 3、質問してくるすべての人
- 4、専門書（外国語と母国語）と辞書
- 5、インターネット
- 6、翻訳と通訳の相互補完

三、車両用語（日本語、中国語）

ここで、この鉄道車両の翻訳/通訳をする際に感じたことをお話ししたいと思います。一編成の車両には、部品は1万個以上があるとされています。また、数だけではなく、実際の翻訳と通訳の時、幅広い分野にも及びます。

以下車両そのものを中心に、車両を簡単に紹介しながら、単語を説明していきたいと思っています。（別紙：単語表を参照）

例えば、「妻」は一般的には、「夫人」、「太太」、「愛人」と訳しますが、車両の場合、両端の壁を指し、中国語は「端牆」と言います。

車両の動きについて、日本語は「前後」、「左右」、「上下」の振動といますが、しかしその動きを中国語の「前後」、「左右」、「上下」に直訳することはだめ、ちゃんとした専門用語が存在しています。「伸縮運動」、「横揺運動」、「浮沈運動」という表現なのです。さらに、面白い中国鉄道用語はその軸回りの回転運動です。「点头運動（頭を縦に振る）」、「摇头運動（頭を横に振る）」という言い方で、考えればすごく納得できるすばらしい表現です。

当然、違う状況下で、違う文書の中でまた違う訳し方がありますが、あくまでも翻訳の一例です。

四、まとめ

一般の人は中国人なら中国語は当然分かり、日本人なら日本語は当然分かる筈と安易に考えているようですが、実際はまったく違います。中国語には「隔行如隔山」という言葉があります。職業が異なれば相手の職業の知識・常識など実際携わらないと、本当に見当

もつかない部分がたくさんあります。また時代とともに、科学技術や新しい経済・経営の学説などが日進月歩で進歩しています。言葉も生活と社会とともに変化しています。また、たとえその単語だけを知っていてもそれだけでは不十分で、訳す時、中国語らしい中国語であるか、日本語らしい日本語であるか、常に心掛けなければなりません。

以上紹介した単語や、時間の関係で紹介できなかった単語をマスターする過程には、まるで人と人との付き合いと同様で、その単語との最初の出会い、知り合い、理解、再会、確信・信頼などの物語りがあります。ですから、仕事をしながら、中国語にも日本語にもまた英語にも何時も新しい発見があり、単語の一つ一つに対して自然と愛着心が湧いてきます。

今後も常に好奇心を持ち、常に様々な分野の新しい知識を勉強・吸収・研鑽・活用することに心掛けて行きたいと思います。

別紙：単語

日本語	中国語（大陸）	中国語（台湾）
中空押出し型材	中空挤压型材	
パンタグラフ（パンタ）	受电弓	集電弓
台車	转向架	轉向架
窓	车窗	車窗
ほろ（ホロ）	风挡	外罩
屋根	车顶	車頂
側	側墙	側板、側牆
妻	端墙	
床	地板	地板
床下機器	车下设备	車底設備
スカート、床下覆い	裙板	車底架裙板
窓ふき器、ワイパー	刮雨器	雨刷
ブレーキ	制动、刹车	煞車、制動
前後振動	伸缩运动	
左右振動	横摆运动	
上下振動	浮沉运动	
ローリング、横揺れ	側滚运动	
ピッチング、縦揺れ	点头运动	
ヨーイング、偏揺れ	摇头运动	
品質	质量、品质	品質
リード・タイム	提前时间	前置時間

当たり前のように当たり前でない中国語

2006年1月21日 ビジネス中国語学会研究会にて

岡野涼子

“中国”というテーマがメディアで一般化されていく中、中国語或は中国業界関係者にとって疑問にも思わない単語について、一般的に受ける質問をとりあげる。また、電話ならではのやりとりを紹介する。

(1) **単位**：①計数・軽量の単位 ②単位、機関、団体、企業、工場、学校、部門、職場 等。

通常、中国業界関係者の中での「単位」使用法は、科学技術・経済方面を除き、②の場合が多いように思う。例えば、「今度来社する中国の訪日団は商務省のどこの単位か?」「中国のどの単位が後援している展示会か?」というように、日本で言えば機関、企業、部門を示す。ところが、全く初めて予備知識も無く中国からの文書やインターネットの情報に触れると、簡体字とはいえ漢字表記であり、展示会等のホームページであれば当事者の専門分野でもあるので全体の意味はおぼろげながら察するものの、全く関係のない（ように見える）“単位”という単語があるので、「単位とは何ですか?」「何の単位のことでしょうか?」という質問が寄せられることになる。

(2) **幹部**：①幹部（党機関・国家機関・軍隊・人民団体の用務員・兵士を除く公職者、日本の「公務員」に該当）②公務員に限らず指導者・管理の任務を担当する者、即ち日本の「幹部」の意味。

中国からの来訪者の役職を事前に確認すると、“部長”（＝大臣），“局長”、“処長”、“翻訳”（＝通訳）といった職分のほか、「幹部」という単語を目にする。日本では②の意味で使用する人が多いが、①の意味で、党や国家機関の役職の無い平職員を指す場合もある。①の意味を知らなければ、配席や日本側の対応者を決めるのに「幹部とは実際にどのような役職の方ですか?」といった問い合わせや確認が入ることになる。

(3) **工会**：労働組合

日本での労働組合の定義では、管理者は労働組合員ではありえない。しかし、中国ではそもそも組織形態が違い管理職も組合員となれ、その活動も似て非なる部分が多いように思う。“工会”をそのまま「労働組合」と訳するのが正確なのかはともかくとして、字面より「工業会のことですか?」という質問がでることもある。

(4) **工具**：①工具、道具、器具、参考書の総称 ②比喩的に手段、方法

「工具」のイメージにとらわれ、商談会などで「会社名に“工具”の表記があるのに工具を扱っていない」ということが発生する。実際には、中国の書店の“工具”コーナーでは辞書や参考書を並べられおり、②の用法も数多くある。

(5) **公司**：会社、法人、商工業企業体

日本語読みでいえば「こうし」となるにも関わらず、中国語読みの「コンス」に呼びなれている為、「‘こうし’とはなんですか?」と質問されても、漢字表記を確かめるまで何を訊ねられているか判らなかつたことがある。「公」の漢字が持つイメージからか、「公的機関」の印象の持つ場合もあるようである。

(6) **绿色食品(産品)**：健康安全食品・人体に対して特に無害な製品（※筆者の意識）

緑色の持つイメージからか、「健康（機能）食品ですか?」「植物から作った製品ですか?」といった問い合わせを受けることがある。勿論、植物のみが原料というわけではない。因みに「“緑林＝lulin”：山林に結集して支配者に反抗したりする集団」ということもあるので、色の持つイメージが一定でない良い例である。

(7) **人性化**：ユニバーサル

‘人’という文字のイメージから「人格のことですか?」「人間的ということですか?」とい

うようにそのまま、「人」そのものの関連語を連想するパターンが多い。但し、後述のユビキタスと同じ様に、訳語が確定していない。

(8) 問題：質問／問題／トラブル 他

日本語で「問題」といえば、重々しく捉えられがちだが、中国語の場合、「質問」や「トラブル」等様々な意味合いを持つ。書面に“問題”の単語を発見し、「どうもクレームらしいが、内容がわかりません」といった問い合わせを受けるが、実際には「質問」程度の内容であったりする。蛇足だが、“問題”と同じく日本より使用範囲が広い単語に“課題”がある。論文等で執筆者を“課題組”としている場合があるが、日本語では「研究グループ」に相当するものだろう。

(9) 中心：中心／核心／センター

日本語では「位置」の意味から使うことが多い。研究所等の組織・機関としては英語のカタカナ表記で「センター」とする為迷うことは無いが、中国語だと「位置」をあらわすにしても、「組織・機関」を表すにしても“中心”である。その為、「組織名」として認識し難いようである。

(10) 中央：中央／国家の政権の最高指導機関

中国語の“中央”の意味は、“国家”、“中国政府”の意味で使用されることも多々ある。“中央”という名称だけ表示され、「どこの中央ですか？」と確認されることもあれば、マスコミで“北京中央”の組み合わせを目にして、「北京の中央とはどこですか？」という質問を受けることもある。

また、最近のカタカナ語で訳すのに大変悩むのが「ユビキタス」である。そもそも日本語で説明するにも難儀な単語で、使用者により意図がこめられる為、益々訳しにくい。筆者が扱ってきた記事・文書では主に企業のイメージ戦略のキーワードとして扱うことが多かったが、その訳語はほとんど同一であったことがない。“星羅棋布的網絡”、“無所不存在”のほか、音訳しただけのものもある。その訳語の多様さには戸惑うばかりである。(後日、インターネット業界では「泛在」という訳語があることも指摘戴いた)

その他、中国の社会或は業界を知らなければ判らない「九・八」(“中国国際投資貿易商談会”＝毎年厦門で開催)、「三・八節」(＝国際婦人デー)等、日付がそのまま略称代わりとなっている言い回しも見逃せない。中国に限ったことではないが、その国の歴史や風土に基づく単語で、更に略称で数字を使用しているとなれば、予備知識が無ければ理解不可能なのは当然である。

最後にこれから就職活動される学生の方々には、中国事業に関わるのであれば知識として当然備えているが、実際には咄嗟に対応できない項目を幾つか参考までに紹介したい。

一つは、日本の地名である。ピンインや簡体字での表記はできても、いざ耳にした場合、直ぐには思い当たらないので、特によく耳にするとと思われるものを挙げておきたい。東京、横浜、大阪、京都、神戸(首都或は世界的観光名所、華僑居住地)のみならず、最近では温泉や雪の名所として北海道、地理的に近い沖縄、イベントの開催地として名古屋(“愛知世博”＝愛知万博)、りんごの産地としての青森等のほか、新潟の場合、地震の被災地としてだけでなく、中国駐在事務所が特に活発に活動している為か意外に耳にする。

経済界の動向によって脚光をあびる単語にも注目しておきたい。2001年に中国がWTO加盟後、サービス業の発展は目覚しく、それまで外国企業が参入しにくかった卸売・小売業、広告業では、例えば“設計”(＝デザイン)という単語が、新造語では無いものの使用度が格段にあがっているように感じる。最近では日本国内でも企業のパンフレットやホームページ、ショールームで中国語表記が増えてきているので、正確かどうかは別にして、自分が興味ある分野については参考となるだろう。

最後に、最も基本的で単純な分野だが、中国の姓名についてあらためて確認しておくと思ふ。

ど役に立つ。幸か不幸か、中国名では同姓が非常に多い。ここでは、最近発表された“百家姓”レポートの上位 50 の姓を紹介しておく。

中国科学院遺伝发育生物学研究所が中国で多い姓トップ 100＝“百家姓”を発表。同調査は 1,110 の県、市の 2.96 億人分のデータで得た 4,100 の姓を元に発表されたもの。以下は上位 50。

李、王、張、劉、陳、楊、黄、趙、周、吳、徐、孫、朱、馬、胡、郭、林、何、高、梁、鄭、羅、宋、謝、唐、韓、曹、許、鄧、蕭、馮、曾、程、蔡、彭、潘、袁、于、董、余、蘇、叶、呂、魏、蔣、田、杜、丁、沈、姜〔出所：「人民日報」2006 年 1 月 11 日付より抜粋〕

よく言われることだが「言葉は生き物」であり、こと経済発展の著しい中国では、その勢いがそのまま言語の広がりにつながっているように思える。中国語学習者として、今後も様々な形で吸収し、習得していきたい。〔了〕

※（1）～（10）の単語はピンイン順。解釈は、注釈のない限り「中国語辞典（白水社 伊地智善雄編）/2002 年 5 月発行」から筆者が抜粋したもの。

※事例はあくまでも筆者の体験に基づくもの。

日本ビジネス中国語学会

設立趣意書

明治以来終戦時に至るまでの間、わが国の外国語教育は、先進文化を吸収するための文化語学と、近隣諸国との軍事・通商に備えるための実用語学にはっきりと分かれていました。従って文化語学はアカデミックな研究であり、実用語学は技術的訓練にしかすぎないと見られてきました。そういう潮流の中で、中国語学界のエリートたちは、中国語学を文化語学としてアカデミックな研究の対象にしようと、第2次大戦末期に力説されるようになりました。

第2次大戦後は、曲がりなりにも中国語学はアカデミズムの片隅にその位置を見つけ、大学の教員もアカデミックな研究によって自分の業績を作るようになりました。しかし、一方で実用語学としての中国語学は軽視されるに到りました。外国語大学や社会科学系学部でも、商業経済や新聞雑誌に関する中国語研究は次第におろそかになり、そのため、この方面の研究に従事する人々は、共同に研究する基盤もなく業績を発表する媒体もないという有様であります。

言うまでもなく、日本のおかれている国際的地位は明治・大正と大いに異り、外国文化に関する見方も先進・落後という単純な区別はなくなり、わが国と中国との関係もまた文化から経済まで広くかつ深いものになっています。中国語の言語理論的研究はもちろんより一層発展させる必要があります。同時に中国語の実用的研究はそれ以上必要であると思われます。

近畿在住の数人の研究者が時折顔を会わせて論議しているうちに、全国各地に散在しているそしてまた学界のみならず経済界で活躍しているこの方面の研究者を結集して、中国語の実用的研究——例えばビジネス中国語・通訳翻訳の研究等々を組織的、体系的に推進するために、ここに「日本ビジネス中国語学会」をつくろう、という議が持ちあがりました。

趣旨に賛同下さる方々のご参加を心から期待しています。

日本ビジネス中国語学会会則

第1条 (名 称)

本会は日本ビジネス中国語学会と称する。

第2条 (事務所)

本会は事務所を大阪市内に置く。

第3条 (目 的)

本会はビジネス中国語に関する研究及び関係諸団体との交流を通じて、我が国における中国語学習者の語学能力の向上を図り、もって日本と中国の友好交流の発展に寄与することを目的とする。

第4条 (事 業)

本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

会長は必要に応じて事業推進グループを設置することができる。

1. ビジネス中国語、翻訳・通訳に関する研究。
2. 日中間の相互理解を深める為の教育・研修事業。
3. セミナー、講演会の開催。
4. 機関紙の発行。
5. ビジネス中国語検定。
6. その他前各号に関連する事業。

第5条 (会 員)

本会の会員は次の通りとする。

個人会員 本会の目的に賛同して入会した個人。

法人会員 本会の目的に賛同して入会した法人。

第6条 (入 会)

本会の会員になろうとする者は、別に定める入会申込書を提出し、承認を得なければならない。

第7条 (退 会)

①本会を退会しようとする時は、理由を付した退会届けを提出しなければならない。

②会員は次の各号の一に該当するときは、退会したものとみなす。

1. 会費を2年以上滞納したとき。
2. 死亡したとき。
3. 会員たる法人が解散したとき。

第8条 (除 名)

会員が本会の名誉を傷つけ、又はこの会則に違反したときは、総会の決議により、除名することができる。

第9条 (役 員)

①本会に次の役員を置く。

会長 1名 理事長 1名 理事 10名以上15名以内 会計監事 2名

②理事及び会計監事は、会員の中から総会において選任する。

③会長及び理事長は、理事の互選とする。

④法人会員の代表は役員の被選任資格を有する。

第10条 (役員の職務)

①会長は、本会を代表し、会務を統括する。

②理事長は、会長を補佐し、会務を処理する。会長に事故あるときは、その職務を代行する。

③理事は、理事会を組織し、会務を執行する。

④会計監事は、経理を監査する。

第11条 (役員の任期)

①役員の任期は、2年とする。但し再任を妨げない。

②補欠により就任した役員の任期は、前任者の残存期間とする。

第12条 (役員の報酬)

①役員は、原則として、無給とする。但し、常任の役員は、有給とすることができる。

②常勤の役員の報酬は、理事会の決議により定める。

第13条 (顧 問)

①本会に顧問、相談役若干名を置くことができる。

②顧問、相談役等は理事会の議決を得てこれを委嘱する。

第14条 (総 会)

①総会は、定時総会及び臨時総会とする。

②総会は会員をもって構成し、この会則に規定するもののほか、次の事項を決議する。

1. 事業計画及び収支予算。
2. 事業報告及び収支決算。
3. その他本会の運営に関する重要事項。

第15条 (総会の召集)

①総会は会長が召集する。

②総会を召集するには、会議の議題並びに日時・場所を開催日の10日以前に通知しなければならない。

第16条（総会の開催）

- ① 定時総会は、毎年1回会計年度終了後3ヶ月以内に開催する。
- ② 臨時総会は、理事会が必要と認めたとき、又は会員の5分の1以上の請求があったときに開催する。
- ③ 総会の議長は、会長がこれにあたる。

第17条（総会の議事）

- ① 会員はそれぞれの一個の議決権を有する。
- ② 会員は他の会員に代理出席を委任することができる。
- ③ 総会の決議は、出席会員の過半数をもって行う。

第18条（理事会）

理事会は、理事をもって構成し、この会則に定められるべきもののほか、次の事項を処理する。

1. 総会における決議事項の執行。
2. 総会に付議すべき事項。
3. 資産の管理。

第19条（理事会の召集）

- ① 理事会は年1回以上開催し、会長が召集する。
- ② 議長は会長がこれに当たる。

第20条（理事会の決議）

- ① 理事会の決議は出席理事の過半数をもって行う。
- ② 理事は他の理事に代理出席を委任することができる。

第21条（資金）

本会は下記の資金により運営する。

1. 会費並びに寄付金。
2. 事業収入及びその他の収入。

第22条（会計年度）

本会の会計年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

第23条（事務局）

- ① 本会の事務を処理するために、事務局を置く。
- ② 事務局は、理事長が統括する。
- ③ 事務局に常勤する職員は有給とすることができる。

第24条（会則の変更）

会則の変更は会員の3分の2以上の承認を要するものとする。

- 付則
1. 本会は1990年12月8日から発足する。
 2. 本会の最初の役員は設立発起人がこれにあたる。
 3. 2002年6月29日、一部改訂

役員名簿

（2007年の総会まで）

会 長	藤 本 恒	京都文教大学
理 事 長	榎 原 茂 樹	大阪外国語大学
		神戸市外国語大学
会計監事	待 場 裕 子	流通科学大学
理 事	井 伊 健一郎	姫路獨協大学
理 事	神 崎 多實子	NH K B S ・ 通 訳
理 事	上 林 紀 子	京都外国語大学
理 事	興 水 優	日本大学
理 事	武 吉 次 朗	前摂南大学
理 事	塚 本 慶 一	神田外国語大学
理 事	戸 毛 敏 美	関西外国語大学
理 事	橋 本 南都子	前獨協大学
理 事	永 富 健 史	日中翻訳サービス代表
理 事	東 浦 正 重	翻訳通訳業
事務局長	岩 下 孝 彦	大阪中国語学院

日本ビジネス中国語学会 入会のご案内

趣旨に賛同される方は、どなたでも入会できます。

入会ご希望の方は、申込用紙に会費を添えて事務局までお申込下さい。

(設立趣旨・47頁、会則・48、49頁をご参照下さい。)

入会費	1,000円 (個人)	年会費	3,000円 (個人)
			(家族会員は1,000円)
	10,000円 (法人)		20,000円 (法人)

会費納入先 郵便為替 00950-9-4857 日本ビジネス中国語学会

連絡先 〒530-0041 大阪市北区天神橋2-北2-26 マルサンビル4F

日中語学センター気付 日本ビジネス中国語学会

電話 06-6353-2442 FAX 06-6353-0664

----- キリトリセン -----

入会申込書

日本ビジネス中国語学会
会長 藤本 恒 殿

貴会に入会致します。

年 月 日

ふりがな 氏 名			女 男	生年 月日	年 月 日
ふりがな 住 所	〒				
電 話	— —				
所 属					

会報 第16号 2006年8月31日 発行

日本ビジネス中国語学会

〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北2番26号 マルサンビル4F
日中語学センター気付
電話 06-6353-2442 FAX 06-6353-0664